

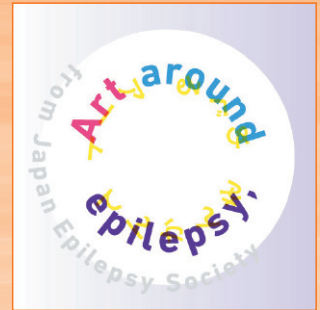


# Book Review

Launching from the exhibition

## “Art around epilepsy” in 2016 and 2017

てんかんをめぐるアート展 2016年, 2017年からの発信



企画・監修：てんかんをめぐるアート展運営委員会, 106頁

編集：山田 毅, 宮部 愛 発行：てんかんをめぐるアート展2017事務局

兼本 浩祐 愛知医科大学精神神経科教授

フランスのジャン・デュビュッフェは1945年に、既存の西洋的な美術教育を受けていない形で生まれた作品群を、「アール・ブリュット」(生の芸術)と名付けたが、その中には様々の疾患と呼ばれる状態の中で描かれた作品が含まれていた。精神医学には病跡学と呼ばれる学問の領域がある。私自身はその学会でここ何年か学会誌の編集委員を務めているが、病跡学の基本的なコンセプトの1つは、病を健康という完成型からの欠損と考えるのではなく、人というソフトウェアが持つ潜在的な可能性が、“病”という機会を得て別の展開をするのだという考えが、その基盤にはある。昨年日本てんかん学会学術集会(横浜)での「てんかんをめぐるアート展」で出会った美しい1枚の絵画との出会いのことをまずは紹介したい。

それは「交通渋滞」をテーマにした絵画で、25区画あるいはそれ以上の区画に整然と分けられ、その1つ1つの区画にその製作者を表現したものと思われる小さな自画像と特定の日・特定の時間の渋滞状況が略図的に描き込まれたもので、一見画一的で単調な繰り返しが大きな盤面を埋めているものだった。この作者がどのような来歴の人で、何らかの“病”があるのかもわからなかったし、なにぶん、「てんかんをめぐるアート展」という誰でもどんな作品でも持ち込めるというコンセプトの作品展なので、そもそも友達にてんかんのある方の作品かもしれないのだが、それでも私達が時間の流れの中で生きることとはどういうことなのかをまるで私の目を開いてくれるように教えてくれたと私には感じられ、そして延々とその場その時の日付がただ刻印されていく河原温の「今日」〈Today〉シリーズを想起させられた。

『哲学とは何か』という晩年の著作の中で、フランスの哲学者ドゥルーズは、芸術とは何かについて触れてい

る。ドゥルーズは、哲学を「新たな差異を産出すること」“variation”, 芸術を「ある瞬間の差異を結晶化させること」“variété”, 科学を「固定された差異を扱うこと」“variable”と呼んでいるのだが、芸術については、ある瞬間を切り出し、そのモニュメントを作る作業なのだとその後に説明を付け足している。片思いの恋をすればわかるように、自分が好きになった人の一挙手一投足は朝と夕方さえ全く別人のもののように感じられることがある。そして恋人の表情を深読みしながら私達は一喜一憂するのだが、それでも私達は朝の恋人と夕方の恋人が別人に入れ替わったのだとは思わない地点に踏みとどまっている。私達にとって相対する様々の対象が一続きのものであるかのような外観をとっているのは、私達・人がその成り立ちにおいて、同じものが同じに一続きであることが揺るがないための訓練を自らに徹底して施すことで世界に参入し、それを基本的な規約としたからであり、それ無しでは私達は世界からはみ出してしまふ。この規約のおかげで私達は共同生活を営むことができるのだが、しかしこの規約は、私達の世界を平板で退屈なものにする原因でもある。だから、芸術はこの規約を緩め、その場その時にしか生まれない一期一会の出会いをモニュメントとして固定し、可視的にするのだというのがドゥルーズの解釈なのではないかと私は考えている。

だから私達はお釈迦様の両手の間で右往左往する孫悟空のように、あたかも自由に動き回っているかのように見えても、この私達の世界へと入る時に交わした規約である意味に囚われてそこから免れることができない。つまり私達の物の見方は、物心がつくのとほぼ連動して一定の枠をはめられてしまふ。一期一会の今、この時との出会いはそれと引き換えに失われ、常に流れては消えるべく運命づけられている。私達がものを認知することそのものが、意味づ